175.

主観評価の文献的考察

Consideration from literature for subjective estimation

奈良県立五條病院放射線科

○野儀 明宏、中前 光弘、吉峰 正、福神 敏、
(Akihiro Nogi)(Mitsuhiro Nakamae)(Tdashi Yoshimine)(Satoshi Fukugami)
北場 栄和、白井 明子、前田 要
(Hidekazu Kitaba)(Akiko Shirai)(Kname Maeda)

【目的】ここ数年エックス線写真の評価に人間の感覚器官を利用する官能検査が用いられるようになってきている。そこで、今までに発表されたものについて、その手法と頻度を調査分析し検討を行った。

【調査対象】調査対象は、総会抄録集(1987-1992年の6年間)である。

【分類法】官能検査ハンドブックの計量的処理法の分類を参考にして、1：識別の可否を目的としたもの、2：刺激の強さの評価を目的としたものの二者に大別した。以下、分類1、分類2とする。

【結果】Fig.1に、過去6年間に発表された官能検査の発表数の推移を示す。Fig.2、Fig.3は、二者に大別したものをさらに、アナログ画像、デジタル画像、その他の3つに分類した年代別推移である。アナログ画像の評価には、分類2の官能検査が多く用いられ、デジタル画像の評価には、分類1の官能検査が多く用いられていた。

Fig.4、Fig.5は、二者に大別したものをさらに、手法別に分類した年代別推移である。分類2で、統計処理を行ったもの、行っていないもの共に増加傾向にあるが、後者の方が前者に比べると多く発表されていた。

Fig.1 官能検査の年代別推移

Fig.2 識別の可否を目的

Fig.3 刺激の強さの評価を目的

Fig.4 識別の可否を目的

Fig.5 刺激の強さの評価を目的

【問題点】

1：分類2の中には、単に視覚にて評価を行っているだけで、統計処理を行っていないものが多く存在した。
2：官能検査の手法が明記されていないものが多い。また手法は明記されているが、使用した試料や観察者の情報が明記されていないものが多い。

【まとめ】分類1は、使用者がその利用の仕方を良く周知しており、今回の分析では問題は無かったと考えられる。しかし、分類2で、多くの問題点が判明した。官能検査で評価を行う場合は、目的にあった手法を選択し統計処理を行った上で、データに信頼性をもたせる必要がある。また、どんな官能検査においても、用いた手法の限界を明確に認識し利用することが肝要であるとする。